

生徒の学校適応を促す取り組み

— Q-U を活用した検討会とエンカウンターを通して —

南国市立香南中学校 教諭 松木伸介

1 問題と目的

生徒の問題行動の背景や要因として、都市化や少子化などの日本の社会の変化によって生じた子どもの社会性の不十分さ・人間関係を作る力の弱さが指摘されている。そして、子どもの社会性や人間関係の問題に対応しきれていない学校の課題も挙げられている。

実習校は、問題行動がほとんどない落ち着いた学校といえる。しかし、他者とかかわりを広げることができない生徒や孤立しがちな生徒など、他者との人間関係が課題と考えられる生徒が少数いる。また、「楽しい学級生活を送るためのアンケートQ-U」(河村 1998)の結果は、約半数の生徒が学級生活満足群に所属している。これは逆に言うと学校生活に約半数の生徒が満足していないことを意味しており、不登校などの不適応行動に至っていないが、課題や問題を内在している生徒が、かなりいると考えられる。

このような生徒の問題に、実習校は組織的に対応できていない面があった。また、生徒個人や学級集団の状態がつかめるQ-Uを用いて生徒理解を深めようとしているが、学校組織として生かされているとは言えず、教師間の生徒の課題・問題の捉え方にズレを生んでいると考えられた。

そこで、筆者は、学級の人間関係を進展させ生徒の学校適応を促すために、特別活動の時間に構成的エンカウンター・グループを実践して、そのあり方や成果と課題を検討した。また、教師の生徒理解や生徒への援助方法の改善を図るために、Q-Uを活用した事例検討会を実践して成果と課題を検討した。

2 実習校における位置づけ

4月の職員会で、人間関係づくりをねらいとした特別活動に構成的エンカウンター・グループを導入することと、Q-Uを活用した事例検討会を校内研修に組み入れることが承認された。

実践授業の時間はすべて、特別活動の学級活動の時間として、月1時間全学年に計画した。筆者が、全学年の授業案を作成し、各学年団で検討してから授業を行った。

3 構成的エンカウンター・グループの実践

エンカウンター・グループとは、自由な雰囲気の中で、メンバーがお互いに心を開いて本音で触れ合う集団体験を通して、自己成長を図るとともに人間関係を形成・進化させていくものである。このうち、自由なディスカッションを主軸とするものを非構成的エンカウンター・グループといい、リーダー(教師)がエクササイズ(課題)を与えていくやり方を構成的エンカウンター・グループ(これ以降は「エンカウンター」表記する)という。

(1) 準備期の実践

実習校は、エンカウンターについて、教師の知識、理解が不十分であった。そのためにエンカウンターの研修を校内研修という形で実施した。また、筆者も指導経験が乏しかったことから、実践経験を積み、指導力を高めるために2年生を対象にエンカウンターの授業を2月から3月にかけて4回行った。

(2) 前期の実践

ア 実践期間・対象

・期間 2010年4月～2010年7月 毎月1回合計4回を計画し、実践した。

- ・対象 1年A組 1年B組

イ 実践内容

(ア) 実践授業 (資料1参照)

1学年2学級で各4回(50分)の実践授業を特別活動の時間として行った。授業名は「ふれんどりータイム」と名付けた。

(イ) 毎回授業の最後に授業評価と自由記述からなる振り返りシートを生徒に書かせた。

(ウ) 事後調査

前期の実践の事後調査として7月中旬に、生徒にアンケート(資料2参照)を実施した。

(3) 後期の実践

ア 実践期間・対象

- ・期日 2010年9月～2010年11月 毎月1回合計3回を計画し、実践した。

第5回の授業は筆者の実習の都合でかかわることができなかつたので、この報告からは除外する。

- ・対象 1年A組 1年B組

イ 実践内容

(ア) 事前調査

エンカウターの実践授業によって、人間関係づくりが促進されたかどうかを測定するために「人間関係チェックリスト」(資料3参照)を使用し、事前調査を9月初旬に行った。

(イ) 実践授業 (資料4参照)

(ウ) 授業の振り返り

毎回実践授業の最後に、前期と同様の振り返りシートを生徒に書かせた。

(エ) 事後調査

- ・「人間関係チェックリスト」10月と11月の実践授業終了時に学級担任が実施した。
- ・教師への質問紙調査

(オ) 追跡調査

「人間関係チェックリスト」を実践授業終了から1ヵ月後の12月に学級担任が実施した。

(4) 結果

振り返りシートの授業評価(資料5参照)では、「はい・だいたい」の肯定的な回答が、すべての項目で80%以上あり、好評であった。とくに、「楽しく取り組みましたか」についてはすべての回で約80%以上が「はい」と回答した。楽しく取り組めることは授業への意欲が高まることにつながり、エンカウターを実践するうえで大切なポイントであることが示唆された。人間関係チェックリストの事前・事後の結果(資料6参照)は、どの項目も評価点が向上していて人間関係づくりの促進が見られ、エンカウターの人間関係づくりの有効性が示された。また、事前調査の平均値が3点未満の下位層において事後・追跡調査にすべての生徒の平均値が上昇していることから、エンカウターは人間関係の状態が良好でない生徒に対して、とくに人間関係づくりが促進されることが認められた。

教師アンケートの結果(資料7参照)は、「望ましい人間関係づくり」についての学校の取り組みとしてのエンカウターの手法の良さや、生徒の自他理解やコミュニケーション能力の促進への効果、人間関係づくりに実践への意欲の高まりを評価した意見が多数を占めた。

4 Q-U を活用した事例検討会

(1) 第1回事例検討会

ア Q-U の実施

5月12日1時間目に全学級同時に学級担任がやり方を説明して実施した。

イ Q-Uの結果分析

Q-Uの結果をもとに学級の実態をまとめるものとして、報告シート(資料8参照)を作成し使用した。報告シートは、担任は自らのクラスを他の教師も所属する学年のクラスを任意に選択し、Q-Uの結果をもとに作成した。

ウ 事例検討会

・期日 2010年5月19日 参加者 教員16名

・事例検討会の流れ

(ア) 事例提供者は報告シートに従って学級の状態・問題を説明する。

(イ) 参加者は、見解の相違や疑問点・確認したい点を質問し共通理解を図り、学級の問題が発生した要因をカードに書き出す。

(ウ) 全員のカードを集めて、似ている内容ごとに分類し、まとめごとに1枚の画用紙に張り付ける。その画用紙を重要だと思う順番に並び変え、協議して参加者全員で統一見解をまとめる。

(エ) 「ウ」で統一見解を得た問題の要因に対して、対応策を考え、カードに書く。「ウ」と同じように協議して対応策の統一見解をまとめる。

(オ) 事例提供者は、「エ」の対応策について自分が行うときに不安に思う点、懸念される問題点を述べ、参加者と対策を確認する。

(カ) 事例提供者は、これから取り組んでいく問題と、具体的な対応策をみんなの前で発表する。

(2) 第2回事例検討会

ア Q-Uの実施

7月12日1時間目に全学級同時に学級担任がやり方を説明して実施した。

イ Q-Uの結果の分析

今回は、生徒個人や学級の良さを捉えることから問題・課題を討議していく流れにしたいと考え、第1回とは内容の異なる報告シート(資料9参照)を使用した。報告シートは、担任は自らのクラスを他の教師も所属する学年のクラスを任意に選択して、Q-Uの結果をもとに作成した。

ウ 事例検討会

・期日 2010年8月6日 参加者 教員13名

・事例検討会の流れ

(ア) 学年、個人の良さ強みについて全員が発表し、その後、見解の相違や疑問点について質問し、共通理解を図る。個々が良さを一つか二つに絞り、その要因について付箋紙にメモし、まとめる。

(イ) 個人のまとめを全員が発表し、画用紙に張り付ける。

(ウ) 学年、個人の気になることについて「ア」と同じようにまとめる。

(エ) 個人のまとめを全員が発表し、気になることのなかから、取り組む学級・個人の課題を絞り画用紙に張り付ける。

(オ) 個々が、絞り込まれた課題に対して、実行しやすい支援や援助を付箋紙に書く。

(カ) 全員が発表し、学年として実行する支援・援助を決定し、画用紙に張り付ける。

(キ) 各学年の代表者が、付箋紙を張った画用紙を用いて「よさ」「課題」「支援援助」について発表する。

(3) 結果

Q-Uを活用した事例検討会の成果として、教師アンケートの結果(資料10参照)から、Q-Uの良さとして生徒の内面と学級集団の状態の両面から捉えることができる効果的なツールであることや、事例検討を行うことによって生徒理解が促進され 具体的方策を取ることができることが示唆

された。また、事例検討会は教師の振り返りや気づきの場になり、自己の変容や成長に役立つことが述べられていた。

5 成果と課題

(1) 構成的エンカウンター・グループ

この実践の成果として次のことが考えられる。①特別活動（学級活動）の時間に人間関係づくり学習を位置づけ実践したことにより、担任を含め他の教員にも参加の機会を設けた。それによって教員がエンカウターの重要性を認識すると同時に、エンカウンターへの心理的なハードルを下げる事ができ、以後の実践への動機づけを高めることができた。②エンカウンターは、望ましい人間関係づくりに有効であり、生徒の「学校不適応」状態を改善・予防していくための有力な方法であることが確認できた。

①については、実習校の課題として「生徒の人間関係づくりの弱さ」を全教職員で確認したうえで、具体的な手法として特別活動にエンカウンターを取り入れた。そのときに教員研修として、エンカウンターについての説明と実際にエクササイズを体験してもらった。さらに、準備期に行った2年生に対する実践段階から教員に参加してもらうことによって、エンカウターの有効性を実感してもらったと同時に、その実施についての心理的なハードルを下げる事ができたと考える。この点については、最後に行った教員へのアンケートに「特別活動のねらいの達成に有効な手法の一つであり、学級担任のスキルになる」「集団づくり、教師と生徒の関係づくりに有効である」「実施する時期や回数も検討し、継続して実施していきたい」などの意見が多数述べられている。

②については振り返りシートの授業評価に肯定的評価が圧倒的に多かったことや、人間関係チェックリストの結果が人間関係づくりが一定程度促進されていることを示唆している。教員の最後のアンケートでも「生徒が変化を見せている」「授業を通して友達と触れ合うことが好きになった」という感想が見られ一定の成果を上げていると考えられる。エンカウンターは、人間関係づくりが苦手な生徒に対して、とくに有効であり、その効果が示されたことは学校不適応の有力な対応策と考えられる。

次に、エンカウンターを実践するうえでの課題を述べていきたい。

ア 特別活動への位置づけ

個人的な実践では、計画的な年間を通した実践は難しい。また、学校としての位置づけがないと校内研修会が開きにくいために、教員のエンカウターの理解や演習が深まらず実践の輪が広がりにくい。そのためにも、教職員全員でエンカウンターを特別活動に導入する目的やねらいを共通理解し、校内での位置づけを明確にすることが重要である。

イ 学級の生徒と学級集団の実態の把握（生徒理解）

問題や課題が内在化されている生徒たちを理解するためには、観察や面接などの従来の方法に加えて、Q-Uなどを使って客観的に生徒を理解していくことが重要である。

学級の生徒の理解が深まってくると、学級の強みや弱み、目指す学級の姿が見えてくる。このことが、自分の学級に適したエクササイズを選択するとき生きてくる。逆に生徒理解が不十分な場合は、エクササイズが学級の実態に合わず、活動に対して生徒が抵抗感を持つことにもなり、エクササイズのねらいが十分に果たせないことにもなるだろう。

ウ 他者とかかわりを楽しいと感じるエクササイズの選択

エクササイズを選択について一般的な原理には、(ア)ねらいによる選択、(イ)モチベーションによる選択、(ウ)生徒のレディネスによる選択、(エ)リーダーの経験度による選択がある(國分、1996)。エクササイズの実践経験が乏しかった筆者は、「イ」と「エ」とともに、活動の中心に「他者とかかわる楽しさ」を据えることを重視した。せっかくのエクササイズも大変だったり、苦痛であるのでは何にもならない。「やらされている活動」なのか「やりたい活動」なのか、「押しつ

けられた活動」なのか「嬉しい活動」なのかという差は、「人間関係」を育むためには大変重要なポイントである。とくに実践初心者には「他者とのかかわりを楽しみ感じるエクササイズを選択」をお勧めしたい。

また、「生徒のレディネスによる選択」が重要な場合がある。それは生徒のレディネスが高い場合は問題ないが、学級のリレーション（本音の感情交流）とルールが低い場合である。エンカウンターを実践する基盤には、生徒の安心と安全を保障することが必要である。リレーションとルールが低い学級は、実施できるエクササイズは限定されるであろう。そして、グループ体験をすることで一部の生徒が心理的ダメージを受けることが予想されるような場合には、個人の活動からスタートするべきである。

エ インストラクション

エクササイズのねらいや内容、ルールを分かりやすく説明することがインストラクションである。ここでの課題は、ねらいをどの程度、生徒に示せばいいのかということである。ねらいを示さないと、生徒はなんのためにこの活動をするのかといった疑問を持ったままの活動になる。逆の場合は、生徒の自由な気づきや発見、体験的理解などを制限し、幅の狭い画一的な理解にしてしまうことが予想される。筆者の場合は、生徒に多少疑問がある場合でも、あれこれとねらいの説明は詳しくせずに、まあ、とりあえずやってみようといった感じで実施した。生徒は言語による知的理解よりも、活動するなかで体験的に理解していき、活動がうまく流れていったように思う。

オ エクササイズ中の観察と介入

教師は生徒たちの参加の仕方、メンバーの感情、コミュニケーションの様子、グループの雰囲気を観察し、状況に応じた介入を行う必要がある。それは、エクササイズのやり方の理解が不十分な場合、ルール違反があった場合、グループでのコミュニケーションが滞り、グループでの課題達成や意思決定が難しくなっている場合、エクササイズに積極的でない場合、心的ダメージを受けた生徒がいる場合である（國分、1996）。

実践のなかで、授業に参加していた学級担任から質問があった。エクササイズに積極的でない生徒に対する介入について、「教師の介入が早いと周りの生徒のかかわりを阻むことになるのは分かっているが、遅いと周りから孤立気味になる。どうしたらいい」というものであった。「周りの生徒からのかかわりをよく観察して判断していきましょう」と答えたが、個人によって介入のやり方は異なるであろうし、一律には答えられない課題であると考えている。

カ シェアリング

体験したことを言葉にして表現することは、言語表現が広がる場になり自己表現力を育てる。しかし、誰にでも言葉による表現力が豊かにあるわけではない。実践の中で次のようなことがあった。人前で話すことが苦手な生徒でもペアになってお互いの気づきや感想を発表し合った後に、相手の感想を相手に代わって発表させると抵抗なくみんなの前で話すことができた。このように、生徒の発表のさせ方を工夫して心理的プレッシャーが弱い状態で発表の体験を積み重ねていくことが大切であろう。

シェアリングにおいて教師は、個々の生徒の心理的プレッシャーに配慮し、自己表現力を育てていくことが、シェアリングの自他理解、共感的理解、自己主張などの意義や効果を深める基礎であると考えている。

キ 実践のフィードバック

どんな優れた教育実践も時々検証し修正していかなければ、形骸化されたものになり、教師の実践意欲は落ちてくる。この実践では、振り返りシートの結果をまとめたものを毎回全教職員に配付し、生徒の授業評価や感想を伝えた。また、人間関係づくりが促進されているかどうかを測るために「人間関係チェックシート」を使って、エンカウンターが人間関係づくりに有効なこと

をデータとして教職員に示した。これらはエンカウターの良さを認識させ、教師の意欲を高めることにつながったと思われる。しかし、エンカウターの校内研修は1回しか実施することができず、エクササイズ中の観察や介入、シェアリングのやり方、まとめ等のことについて、先生方の理解やスキルを高めることはできなかった。当然、筆者自身がまだまだ未熟であり、先生方を指導できるわけがないのだが、外部から講師を招いて校内研修を実施するべきであったと反省している。

(2) Q-U を活用した事例検討会

まず、①生徒理解の改善が図れたか、②生徒への指導・援助の改善が図れたかについて考えていきたい。

①については、「Q-U」を活用したことで「生徒に対する共通認識を持つことができた」「データをもとに協議していくことで生徒理解を深めることができた」の教師アンケートの意見のように共通の客観的資料を用いることで共通認識を持ちやすく、協議が深まりやすい効果があり、生徒理解が深まったと考えられる。また、「プロット図だけではなく、質問項目の結果の一覧を分析することで、プロット図だけでは見えない生徒個々の分析ができた」「なんとなく思っていたことが数字となって現れてきているので、自分の考えを確認できたし、わかりやすかった」の教師の意見のように、観察法などでは、はっきりしなかったことや見えていなかったことが明確になるなど、生徒理解の視点を拡大する効果があることが分かる。教師は「Q-U」を活用することで、自分が見えていたものと見えていなかったものをはっきりさせていくことができ、それが生徒への対応が分かることにつながるのではないだろうか。

②の指導・援助については、特別活動・帰りの会のあり方、授業づくり、生徒会活動、教師の姿勢、個々の生徒への指導支援について対策が出された。しかし、残念ながら本実践では、話し合いに出された内容が実践に移されたかどうかまで検証を行うことはできなかった。「対応策を具体的にどう実施するのか」「実践はなかなか難しい」「学年会など、後の行動を起こす必要がある」などの教師の感想にあるように、事例検討会だけでは対応策の実践に移しにくいという課題があり、事例検討会後の学年会などで具体的実践方法を検討する必要がある。

次に、事例検討会のあり方や意義について考えていきたい。

この2回の事例検討会は、学年ごとに生徒理解を深め、対応策を検討する形を取ったために、学年の生徒理解や教師の相互理解は深まり成果を上げることができた。しかし、「ほとんどの先生が授業や生活のなかで全校生徒に関わっているので、他学年の先生からみた意見や生徒個々の様子、対応策を検討する場面設定があればよいと思います」「できれば全員の先生で、全体としてこんな方向でやろうというような話し合いができないでしょうか」という教師の意見にあるように、一つの事例を全教職員が検討していくことで共通理解が深まり、幅広い視点からの対応策が検討され、教師の指導・援助が改善されやすいと考えられる。実習校は小規模校でクラス数が少ないので、クラスごとの事例検討会を計画し、実施することは可能である。生徒理解を深めることは教師の職務の一つであるとして、事例検討会を校内研修に位置付け計画的に実施するべきである。

河村(2004)は、「Q-Uは実施すること以上に、教師たちがQ-Uを活用することに意義があると思う。それは学級経営の考え方、展開の仕方の理解が深まるということだけでなく、検討会を通して教師同士の連携が深まる、リレーションが形成されるからである。その中で、新たな取り組みをしようという意欲が喚起されるからである」として、事例検討会の意義を述べている。

古谷(1965)は、「組織・運営を効果的に進めるカギとなるのは、教員間の共通理解・相互理解である。生徒指導・教育活動の出発点は生徒理解であるが、教師自身が同僚の教師の実態・要求・気持ちを理解できず、協力し合うことはできない。教師の共通理解は、教師がお互いに徹底的に話し合い、相互理解を深めていく中から作り出すものだ」と述べ、共通理解するための前提として、話し合うことで相互理解する必要性を指摘している。

本実践の教師の感想に「クラスや個人の生徒に対して、いろいろな先生と話できたことは大変良かった、普段なかなかこういう時間が取れないので」とあるように、今の学校には、教師が気軽に話し合う時間はあまりない。つまり共通理解する前提が崩れていることになる。だからこそ、事例検討会を計画的に実施して、本音で話し合える時間を確保することは、学校経営のうえでも重要である。

一方、山下（1999）は「教師が生徒指導上の問題や悩みを同僚に話すことができよかったですと思えたなら、その事例検討会は意義がある」と述べ、「事例検討会において周りの教師がどれだけ担任や同僚の教師の話を共感的に聞けるかが大事なことである。他人事ではなく、学年全体や学校全体の問題として、共に生徒指導にかかわっていったり、何かあればいつでも援助できる体制になっているかである」として、互いを尊重する同僚性と、支え合う教師の体制の大切さを指摘している。生徒の人間関係づくりが成長に不可欠であると同様に、教師同士のよい関係、教師集団の結束が教育実践を有効に機能させてゆくための基本的な要素になる。

山下（1999）は、「教職員間の共通理解と具体的対策は大事であるが、事例検討会においてこれらをすぐに求めてはいけない」と述べている。昌子（1965）は、「組織が実践を伴うためには、現在の段階では、全職員による事例検討会を持つことが最適と思われる。…(中略)…事例についての討論は、あくまで生徒本人を理解するためになす討論であり、いきなり対策を考えようとすると形式的になりがちである」と述べている。これらは教師が問題解決を強く願うために、生徒の取った行為の背景や内面の理解よりも、早急に解決を図れる対策を求める危険性を指摘している。生徒の行為の背景や内面の理解なしに対策をたて実施しても根本的な解決になることはなく、かえって問題を複雑にする場合もある。事例検討会を実施するとき、まず生徒の気持ちをくみ取り、背景を把握することから始めなければならない。

(3) 最後に

学級の間人間関係を進展させ生徒の学校適応を促すために、エンカウンターやQ-Uを活用した事例検討会を実施した。本実践における成果について、5月と11月のQ-Uの結果(表1)から考えてみたい。

表1 5月と11月のQ-U「居心地の良いクラスにするためのアンケート」の結果

	1年生			2年生			3年生		
	5月	11月	増減	5月	11月	増減	5月	11月	増減
学級生活満足群	20	23	+3	21	25	+4	17	19	+2
学級生活不満足群	10	7	-3	10	6	-4	14	7	-7
非承認群	10	7	-3	14	13	-1	5	9	+4
侵害行為認知群	1	3	+2	1	2	+1	4	4	±0
備考		転出1						転出1	

学級生活不満足群の生徒は全クラスで減少しており合計14人減少した。また、学級生活満足群の生徒は全クラスで増加しており合計9人増加した。個別に見れば、学級生活満足群から非承認群に移動した生徒、学校生活不満足群から非承認群や侵害行為認知群に移動した生徒もいたが、全体的に学級満足群の方に多くの生徒が動いていることが見取ることができる。むしろ、この変化は、現場の先生方の日常的な生徒とのかかわり、指導・教育活動があつてのことと考えられるが、今回の実践であるエンカウンターとQ-Uを活用した事例検討会も一定程度、影響を及ぼしていたと考えられるのではないだろうか。このようにエンカウンターとQ-Uを活用した事例検討会の取り組みは、生徒の学校適応を促進するために有効な手立てと考えられる。

引用参考文献

- 古谷健治 (1965) 非行対策と生徒指導の組織・運営 日本教育心理学会 教育心理学年報 国土社 pp. 36-37.
- 後藤秀世 (2003) 構成的グループ経験が中学校初期の生徒の自己肯定感に及ぼす影響 鳴門教育大学修士論文
- 川崎知己 (1994) 構成的グループ・エンカウンターが中学生の進路意識に及ぼす影響 カウンセリング研究、27 (2)、pp. 132-144.
- 片野智治 (1996) エンカウンターとは 國分康孝 エンカウンターで学校が変わる 中学校編 図書文化社 pp. 18-23.
- 河村茂雄 (1998) 楽しい学校生活を送るためのアンケート Q-U実施・解釈ハンドブック 図書文化社
- 河村茂雄 (2001) グループ体験による学級育成プログラム 中学校編 図書文化社
- 河村茂雄・小野寺正己・粕谷貴志・武蔵由佳 (2004) Q-Uによる学級経営スーパバイズ・ガイド 図書文化社
- 河村茂雄 (2006) Q-Uによる特別支援教育を充実させる学級経営 図書文化社
- 河村茂雄・粕谷貴志 (2007) 公立中学校の挑戦・人間関係づくりで学力向上を目指す 図書文化社
- 國分康孝 (1987) 大学生の人間関係開発のプログラムに関する男女の比較研究 相談学研究 19 (2)、pp71-83
- 國分康孝 (1996) エンカウンターで学級が変わる 中学校編 図書文化社
- 國分康孝 (1999) エンカウンターで学級が変わる ショートエクササイズ集 図書文化社
- 國分康孝 (2001) エンカウンターで学級が変わる ショートエクササイズ集 Part2 図書文化社
- 昌子武司 (1965) 非行対策と生徒指導の組織・運営 日本教育心理学会 教育心理学年報 国土社 pp. 30-31.
- 大関健道 (1996) 準備の手順・指導上の目的・継続的な実践の例 國分康孝編 エンカウンターで学校が変わる 中学校編 図書文化社 pp. 32-41.
- 岡田 弘 (1996) 新しい指導法の提案 國分康孝編 エンカウンターで学級が変わる 中学校編 図書文化社 pp. 16-17.
- 相良賢治 (1992) 教師と生徒及び生徒相互の人間関係を育てる学級活動 國分康孝編 構成的グループ・エンカウンター 誠心書房 pp. 57-59.
- 少年の問題行動に関する調査研究会議 (2001) 心と行動のネットワーク 一心のサインを見逃すな、「情報連携」から「行動連携」へー 国立教育政策研究所
- 高橋裕行・酒井緑 (1989) 学校カウンセリングに求められるもの 福井大学教育実践研究、14、pp. 291-305
- 田中雄三・森谷寛之 (2001) 生徒指導と心の教育—実践編— 培風館
- 植原浩之 (1999) 中学生の対人関係を促進するための構成的グループ経験の研究 鳴門教育大修士論文
- 山下一夫 (1999) 生徒指導の知と心 日本評価社
- 吉澤克彦 (1997) 学級開きのエクササイズ 月刊学校教育相談、(4)、pp. 70-77.
- 吉澤克彦 (1998) 学級の人間関係づくり 12 か月 國分康孝編 育てるカウンセリングが学級を変える 図書文化社 pp. 64-72.